
風車 - かざぐるま -

寿々

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

風車 - かざぐるま -

【ZPDF】

N1197B

【作者名】

寿々

【あらすじ】

十三番隊朽木ルキア中心の話。ちよつと一護×ルキア寄り?

「どうしたものか……」
十三番隊、朽木ルキアは、自分の手の中にあるものを見て悩んでいた。

それは、少し前の「……

「朽木……」れ、お前にやるぞ」

ルキアは、十三番隊隊長浮竹十四郎に引き止められ何かを渡された。

「何ですか？これ……かざ……ぐるま？一つも」

「そうだ。お前に似合つと思つてな。欲しくなかつたら他の奴にまわしてくれ。

どうせそれは俺の貰い物だしな。ゲホッ」

ゲホゲホと咳き込む浮竹。

「大丈夫ですか！？隊長！」

「ああ、大丈夫。ゲホゲホ」

とこうの訳で、ルキアは隊長に悪いかな……と思いつつ一つ貰つてくれる相手を探していたのだ。

「誰に渡せばよいだろうか？」

「おー！ルキアじゃねーか。どーしたんだよ。六番隊になんか用か」
気づけば六番隊まで来ていたらしく、声のするほうに振り返つてみると

阿散井恋次。六番隊副隊長。

(・・・恋次・・か)

恋次が風車をまわす姿なんてとてもじゃないけど想像できない。

「なんだよ。人を馬鹿にした様な目で見てんじゃねーよ。
つて、お前何持つてんだ？」

ルキアの手の中の風車に気づく。

「これか？浮竹隊長に貰ったのだけれど……。

使い道が無いから他の人にはあげようと思つてな」

「そんで六番隊？隊長も俺も風車なんて必要ねーよ

「だな。他をあたる。じゃあな、恋次」

「おう。またいつでも来いよー」

恋次に断られたため、次は四番隊を目指した。

五番隊は、隊長の藍染が反乱を起こし、出て行つたため今行つたら迷惑だらう、と止めておいた。

「ルキアさん！今日はーー！」

「！花太郎」

四番隊第七席、山田花太郎がこちらに向かつて手を振る。

「どうしたんですか？」

「花太郎、風車は好きか？」

不思議そうな顔をして首を傾げる花太郎。

「風車ですか・・・？」

「そうだ。貰い相手を探しているのだが・・・」

ちょっとと考えて、口を開いた。

「ごめんなさい。治療のときに持つてているのはちょっと・・・

「そうか。ならいい」

「はい、すいません」

「誤らなくていいのだが？」

「すいません！ああ！すいませんって言つちやつたーあれ？またすいません??」

歩くのが疲れたルキアは、十一番隊の隊舎の前で座つていた。

(やっぱり探すのやめて持つていようかな・・。でも、二つもいらないし)

「ああーーーー！ルツキーだあーーー！」

いきなりの大声にびくんと肩を揺らす。

一草鹿副隊長？

「めつずらしい！ どうしたの？ ルツキー？」

声のする限り向つても十番隊副隊長草鹿がちるせいない。

万葉集

更才 · · 隊長(三三)

「お前、朽木ルキアだな。なんでこんな所にいいじやん！剣ちゃん一ちょっとくらい」

顔を覗かせたやちらが遮る。

すとん、とやちるが降りてくる。

あれ、これ、要りませんか?」

「父二郎、風車、風車二郎」

ぱああつと顔を輝かせ、風車を見つめる。

「はい。よかつたら、貰つてください」

ね
し
!

息を吹きかけて回れ」とすねぎがね。でもなかなか回らない。

おのれの次からかる彫が御用物のども

「まわんない！ まわんない！ ルッキー、あたしやつぱ要らない

七

やぢるは風車をルギアの手に戻すと、剣ハの両脇にいた。班目一角と綾瀬川弓親の頭を踏み台にして、肩に戻った。（こんのクソガキ……！）（一角、落ち着きなよ）

「あーはい、さよならー。」

仕方が無いので、やちる達が向かつた方向と逆に歩き出した。

てよ

「公本副彖義？」

となるがままは、リヰ子は松本岳菊十番副隊長は引き込まれた。

つ
て
い
た。

卷之三

話すが、何處へ飲んでいたと聞かれて、田舎の隊長が七緒の御子

しまつた、京楽隊長なら貰つてくれたかも、と

川半万はな。とがりがりしが

「いぬやー！仕事しゆー！」

奥から怒声が飛んでくる。十番隊隊長の日番谷冬獅郎である。

木本富蔵長 ご木 事に ませり

ルキアがおずおずと差し出したのは、赤と白の風車。

「風車? な、かし! 桧木 よくそんなもん持てんない! さつきまでなにも喋らなかつた檜佐木修兵と射場鉄左衛門が一人そろつて風車見る。」

「お一人もよかつたら・・・・・」

ルキアは一人のほうに風車を差し出した。

「人は、押し付けられちゃたまらん、といつた様子で首を振る。

「じゃ、俺も・・・」と、射場は帰つてしまつた。

「えー。もうちょっと飲んでいいよお。修へえー」
後に続いて帰るひつとした檜佐木を、乱菊が止める。
なんかよく分からないまま取り残されたルキアは、
田番谷の方を向いてみる。

「あー、朽木。それ、田番谷隊長にあげちゃいなさい！
見た目は子供だからきっとあ・・・」

「松本！……！」

本日一度田。ルキアの耳に田番谷の怒声が飛んできた。

そのまま十番隊にいたら、お酒を飲まされてしまつ、と
ルキアはそそくさと十番隊を後にした。

（十番隊つて、もつとちゃんとした所だと思っていたのだが・・・
ちゃんとしていたのは、田番谷のおかげだったらしい。
(ひつなつたら、あやつしかおらんな・・・)

ルキアは、今度は寅の方角に走り出した。

どん！

ゆつくり走っていたつもりなのに、誰かとぶつかつた。

「お主、大丈夫か？」

「よ・・・夜一・・・さん」

目の前にいたのは、自分の顔を心配そうにのぞきこむ夜一だった。

「夜一様こそ、大丈夫ですか！？」

「わしは心配ない。それよりルキア、大丈夫か」

「は・・はい！大丈夫・・・です！」

隣にいた二番隊隊長碎蜂は、ルキアをきつーと睨んだ。

「これ、碎蜂。そんなに人を睨むでない。・・お？
ルキア、お主が持つているそれは風車じやな？」

「は・・はい！」

ルキアが夜一の前に風車を差し出す。

碎蜂はますます面白くなさそうな顔をした。

「要りますか？夜一さん」

「悪いが、わしがいい。碎蜂・・も要りでじやねん。」

そにこち! あいこは、見てみてはどこの? こ

「面白そう」と手を叩くと、ルギアは「」を「」と耳打ちした。「はいー今から渡しにっこりと思つてこたんですー。」

「 そ う か 。 じ ゃ 、 気 を 付 け て い く ん じ ゃ ぞ 」

「はい」

夜
一
と
石九

夜一と碎蜂はくるりとむきを変えて歩いていった。
いちばん最後に、ルキアはもの凄い殺気のこもった鋭い視線を
牟峰二ろづせられ二。

石蠅にあひせられた

四番隊、救護詰所。

黒崎一護はおつとめていた。

(静かだな)

藍染の反乱が治まつたことで、一時期、ソウル・ソサエティは平和になつた。

(もつと、もつと強くならなきや。」れども藍染に勝て……)

卷之三

静かな病室に大きな声が響いた。

「ムーラン」

怒鳴りながら病室に入ってきたのは、はあはあと息を切らしたルキ

思
考
レ
ビ
ュ
ー

鳥切れか少し擦れ無いで 黒毛で 講の西の近い地

通騒曲で

「あ？」

だから一歩もと詰りでいるのだ

いや・・なんも語ってねえじゃねえか

むつと、ルキアが顔を歪ませた。

「御託はいいから受け取れ！」

「へいへい。なんだこりや。風車？俺に？」

一護は不思議そうな顔をして、風車を指でまわす。

「ま、ありがとな。遊子と夏梨にでもやつとく」

「あ、そうしといてくれ」

会話が途切れた。

ルキアはベットの脇に座つて、どう切り出してよいか迷っていた。そして一護もまた、風車を指で回しながら、どうしていいか迷っていた。

「じゃ、私は・・・十三番隊に帰る。浮竹隊長が心配しているかもしないからな」

「そ、だな」

ルキアが部屋のドアの取つ手に手をかけた。

「ルキア！」

「・・・なんだ？」

一護はちょっと恥ずかしそうに笑い

風車を持ち上げた。

「ありがとな！」

ルキアがくすつと笑つた。

「私こそ、ありがと」

「？」

「え、つと処刑の時・・・助けてくれて・・・兄様とも、ちょっと仲良くなれたり・・・。一護のおかげ・・・だ。

藍染に殺されかけた時も・・・世話になつたな

言葉に詰まりながら、しどろもどろになりながら

ルキアは顔を真つ赤にして、御礼を言った。

「じゃ、じゃあな！」

「おう！また来いよ！」

ぱたぱたぱたぱたぱた・・・

「朽木！お帰り。風車を貰ってくれる相手はいたか？」「う・・・浮竹隊長！どうしてそれを・・・」

帰ってきたルキアの顔を見るなり、笑つてそう言った。

「それくらい分かるさ。で、いたか？」

「は・・はい」

「そうか、良かつたな」

ルキアは照れるように笑つた。

「朽木」

「はい？」

「何か、いい事あつたか？」

「えええ！？」

驚きのあまりに、ルキアが大声を上げた。

「ななな・・・なんですか・・・？」

「いや。さつきから嬉しそうだつたからな」

「そ・・・そうですか・・・？」

ルキアが頬に手をあててペタペタ触つてみる。

（どうしたんだろう・・・私）

ふいに、一護の笑う顔が浮かんだ。

（え？え・・・えええ！？）

ルキアが顔を真つ赤にして慌てふためく。

そんな様子を、浮竹はくすくす笑いながら見守つていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1197b/>

風車 - かざぐるま -

2010年10月9日14時20分発行